

中小企業と大企業

—ヴァスケス氏とゴーン氏—

1. 新自由主義が支配する資本主義

年末年始にかけて世間の耳目を引いた話題のひとつは、19 年前に瀕死の状態に陥った日産を再建した立役者カルロス・ゴーン会長を、日産の経営陣が不正な報酬を取得したかどで東京地検特捜部に内部通報し、同会長と代表取締役のグレッグ・ケリー氏が東京地検特捜部に逮捕され、拘留所に拘留された事件である。ゴーン氏は、総額 100 億円近い報酬を受け取るような約束をさせたが、有価証券報告書に記載していなかったために違法とされたのである。

新自由主義が主流になりつつあるアメリカでは、大企業の CEO の報酬が 100 億円規模であるとか、トップ 10% の富のシェアが、2010 年にはアメリカでは 70% 強、ヨーロッパでは 60% 強であり、その格差がさらに拡大しつつある実態がある¹。その環境を背景に、今まで比較的格差が少なかった日本においても、政府および財界が格差拡大の政策（企業減税や TPP、ゼロ金利政策など、いわゆる「アベノミクス」）を推進していることに符丁があっている。これは一般の人びとが将来を不安視し、危機感を懐くゆえんとなっている。さらに時を同じくして、日産社内では長年にわたって行われてきた自動車の検査記録の改ざんが明るみに出、2017 年 10 月 2 日には 121 万台のリコールが表明された²。さらに、新たな排ガス検査不正が 5 工場で 1171 台あったことが発覚した³。これらが、ゴーン会長の「合理化」による利益改善の結果と結びついているかどうかは明らかにされていないが、検査部署で人手不足になって「無資格者」がめくら判を押ししたとか、ゴーン氏が乗り込んできて 2 万人の「合理化」（＝解雇）を断行したことが急カーブの利益改善に直結したと言われていることから、無関係だという人はまずいないだろうと思われる。

2. 生きにくい日常を直視した詩人

この正月に、フェルナンド・ペソアというポルトガルの詩人（1888 - 1935）の『不穏の書、断章』⁴という一風変わった本を読んだ。著者は繊維を扱う貿易会社の 5 人ほどが働く事務所で簿記系の補佐として、毎日文書の作成や帳簿付けの仕事を地味にこなして

¹ トマ・ピケティ、山形・守岡・森本訳『21 世紀の資本』 p.364

² 「無資格検査で処分 日産法令順守に宿題」『日本経済新聞』2018 年 3 月 27 日

³ 「データ不正全体の 5 割超 日産、無資格検査不正後も」『朝日新聞』2018 年 7 月 10 日

⁴ 澤田直訳、平凡社、2013 年

薄給ながら生計を立て、務めの時間以外は執筆に没頭していたという。その遺稿は膨大に残っていてじょじょに知られるようになり、今ではポルトガルを代表する詩人と評価されて、紙幣に肖像画が載っているという。

生きにくい世の中の日常生活を感性豊かに表現している人で、中小企業のしがたない事務系サラリーマンの気持ちを代弁している。たとえば、次のような断章も見える。

ただ考えない者だけが結論に達する。考えるとはためらうことだ。行動の人は決して考えない。

人生は意図せずに始められてしまった実験旅行である。

偽の人生は、他の人びとと共有するもの。

実用生活、役に立つ暮らし。

棺桶のなかで終わる生。

3. 頼もしい中小企業主

その詩人が雇い主ヴァスケス社長について次のように言っている。もちろん作者は狭い事務所の中で毎日社長と顔を合わせている。社長は快活なやり手のヴァスケス氏である。

私たちはみな自分のヴァスケス社長を持っている。目に見えることもあるし、見えないこともあるが、私の場合は、現実にヴァスケスという名前の愉快的な男だ。ときにはつつけんどんだが、悪気はないし、損得で動くが義理がたい。それに、多くの天才やそこらにいる育ちのよい連中には欠けている正義の感覚もある。他の人の場合、ヴァスケス社長とは、虚栄心、金銭への飽くなき欲望、栄光、不死だったりするのだろう。そんなものよりはまだ人間ヴァスケスのほうが主人としてはまだ。困ったときに、世にある他のどんな主人よりずっと近づきやすい。

政府とつるんで儲けている会社をやっている友人が、私の給料が安すぎると思って、先日私にこう言った。「ねえ君、君は搾取されているんだよ」。それを聞いて、私は実際そのとおりだということを思い出した。しかし、私たちは誰でも人生で搾取されねばならないのだから、どうせなら、繊維貿易商のヴァスケスに搾取されるほうが、虚栄心や栄光や恨みや妬みや不可能なものに搾取されるよりましじゃないか、とも思う。

搾取されているには違いないが、大企業で搾取されているより良いという。彼の社長は毎日接することができる頼りがいのある親分である。

4. 大企業経営者にとっての疎外

詩人ペソアが納得している職場に比べて、大企業には、経営者と従業員音の間の人間的なつながりができることは期待できない。規模が大きいことは、従業員にとっても手掛かりがないし、経営者にとっても組織の隅々までは見えない。

人生とは自分が知っているもののことだ。農夫の目には自分の畑である平原がそのまま世界であり、この平原は一つの帝国だ。自分の帝国すら大したものではなかった皇帝の目には、その帝国は平原にすぎない。貧しいものは帝国を持ち、強者は畑を持つ。実際、人が所有するのは自分の感覚以外のものではない。だから、感覚の上でこそ自分の存在の現実を打ち立てねばならないのだ⁵。

「皇帝の目には帝国は平原に過ぎない」という言葉で思い出すのは、第一次世界大戦を始めたカイザー・ヴィルヘルム 2 世の野望である。ただただ帝国を拡大したいという栄光の欲望だけであって、実質の統治や国民の福祉がどうあるべきという理念があつてのことではない⁶。ヒトラー率いるナチスの帝国もそうであった。

カルロス・ゴーン氏にとっての日産という企業内部は、カイザーにとっての帝国版図のようなものではないか。そこでの個人個人が道具に見えてしまったとき、みずからの偉大さを確かめる指標は、獲得した金額の数値だけになったのではなかろうか。従業員にとっても、経営者にとっても大組織は仕事の道具ではなくて、各個人を疎外する顔のない面妖な空間に変貌したのではないだろうか。

(2019年1月3日 哲)

⁵ フェルディナンド・ペソア、前掲書、p.155

⁶ バーバラ・タックマン『八月の砲声』ちくま学芸文庫。2004年、上、pp.66-69